

大崎の魅力、元気に発信中

大崎市古川のみやぎ大崎観光公社がこの12月7日で設立10周年を迎える。対外的な活動が多いため市民にはあまり知られていないが、同社の事業は実に多彩。大崎を巡るツアーの企画運営、物産品の出張販売、ふるさと納税の取り扱い、大崎市の公式キャラクター「パタ崎さん」のスケジューリング管理なども担う。さまざまな事業、手法で大崎の魅力を発信し続ける同社取材した。



大崎市公式キャラクター
パタ崎さん

大崎ならではのオンリーワン体験をお届け

大崎市古川の商業施設「醸室（かむろ）」の一角に、みやぎ大崎観光公社はある。時代をタイムスリップしたかのような情緒ある2階建ての蔵。その2階に同社の事務所、1階に同社が運営する大崎市観光物産センター「DOZO（ドゾ）」がそれぞれ入居している。

同社は2011年12月に設立された。2008年の大型観光キャンペーン「仙台・宮城デスティネーションキャンペーン」の盛り上がりから、「ツアーや体験プログラムを企画運営できる組織を大崎市に」との機運が高まる。別府や湯布院といった有名温泉地への視察、観光がテーマのシンポジウム開催などを経て誕生した。

翌年には国内旅行が取り扱える第2種旅行業に登録。旅行業登録は業務エリアによって第1〜3種などに分類される。同社のような市町村の観光推進組織は、隣接の市町村に限定される第3種登録が主流で、2種登録は当時、全国的にも珍しかった。「宮城県内では南三陸町観光協会に次いで2例目だった」と代表理事の真山隆宏さん。ツアーにかける本気度がうかがえる。

コロナ禍以前は大崎の自然、食、人、伝統などを生かしたツアーを多数企画した。中でも人気は、ゴールデンウィーク恒例の「鴨子ダムすだれ放流」の見学ツアー。高さ約80mから落ちる大量の水を、普段立ち入ることができないダム直下から見学できるとあって、ダム

ファンにはたまらない企画だ。毎回、全国各地から参加者が集まり、だいたい前から開催を心待ちにしている人も多い。また、田尻無栗沼のマガンのねぐら入り、朝の飛び立ちの見学ツアーも根強い人気で、



姉妹都市、東京台東区でも大崎市の物産をアピール



生産者の思いや情熱も一緒に伝えている



各地の「ご当地キャラクター」たちと共演する我がパタ崎さん



鴨子ダムすだれ放流の見学ツアーはダムマニアも大満足の人気企画



大崎市の姉妹都市の商品も期間限定で販売。写真(上中)はとやま黒部市うまいものフェア開催時の様子



DOZOでは定番品のほか、季節商品も販売している。10月下旬からは品種もさまざまな新米が勢揃い

「鳥好きな参加者が多く、パタ崎さんが駅でお出迎えするととても喜ばれます」と真山さん。

常務理事兼事務局長の星義一さんは「ここにしかないオンリーワンの体験を柱にしている。新たに生み出すのではなく、先人から残された資源を商品化、観光化していきたい」と強調する。

ツアーは市民の参加も歓迎だ。「知ってはいるけれど見学までは至らない、そんな方も多いはず。地域外に出掛けにくいご時世なので、この機会に地元を見つめ直して」と真山さんは呼び掛ける。

「大崎耕土」を切り口に関係人口を創出

今後は世界農業遺産「大崎耕土」をテーマにした観光に力を入れる。「大崎にある豊富な観光資源を新たな切り口でアピールできる好機。問い合わせも増えていて、注目度の高まりを感じている」と真山さん。副代表理事の早坂竜太さんも「大崎耕土の自然や農業、食文化、さらに人と人との絆で何百年もの間、豊饒の大地が守られてきた営みは人の原点回帰に通じ、特に都市部の人々には魅力的では」と分析する。

大崎の物産のPRも大切な業務の一つだ。市外での出張販売に加え、贈答のシーズンにはおすすめの特産品を集めたギフトカタログを作成。最新号には、同社が地元企業の協力で新発売したオリジナルハンバークが登場。牛タン入りと

ビーフの2種類で、それぞれの旨味が存分に味わえる。「ふっくらと柔らかく、ナイフを入れると肉汁があふれ出ます」と星さん。

大崎の物産はDOZOでも販売している。さらに、不定期開催の姉妹都市フェアでは、大崎市の姉妹都市である東京都台東区、愛媛県宇和島市などの商品を期間限定で取り扱う。去る9月に開催された、とやま黒部市うまいものフェアでは、姉妹都市提携されたばかりの富山県黒部市の特産品が並び、ほたるイカの沖漬けや白えびチップスなどが人気を博した。

同社設立から10年。事業拡大に伴い、社員は3人から17人に増えた。3代目の代表理事となる真山さんは「初代で旅館弁天閣社長の菊地武信さん、2代目でもちべえ社長の佐々木傳兵衛さんのお二人が築き上げた強固な基盤を足掛かりに、さらなる発展を目指す」と節目に思いを新たにしている。

観光客のニーズや旅の形は日々変化する。先日はオンラインツアーを企画し、稲刈り模擬体験や味噌蔵見学などを楽しんでもらった。観光に訪れる「交流人口」に加え、二度三度と足を運び密接に関わりを持つ「関係人口」の創出も今後のカギ。「大崎を訪れるお客さん、弊社の会員や地域の人たちなどさまざまな皆さんをつなげ、地域づくり、まちづくりを担う存在でありたい」と真山さんは意欲を示す。

コロナ禍を抜けた先の、同社の活躍を大いに期待したい。



醸室内の蔵(写真右)2階に観光公社の事務所、1階に観光物産センター「DOZO」が入居している。店先に鎮座する、迫力満点の釜神様が目印



みやぎ大崎観光公社
代表理事 真山隆宏さん
副代表理事 早坂竜太さん
常務理事兼事務局長 星義一さん

Information

一般社団法人みやぎ大崎観光公社 大崎市観光物産センター「DOZO」
住所 / 大崎市古川七日町3-10醸室内 蔵10 2階 TEL / 0229-25-8120
TEL / 0229-25-9620 営業時間 / 10:00~18:00
https://www.mo-kankoukousya.or.jp/ 定休日 / 年末・元日